

第13回 鶴彬のふるさと 「高松歴史街道フェスティバル」

9/14(日)



- ◆ 第8回 「墓碑法要の集い」
開会 午前10時～閉式 10時30分
会場 浄専寺
- ◆ 第27回 鶴彬をたたえる集い「碑前祭」
開会 11時／閉会 11時30分
会場 高松歴史公園
- ◆ 第12回 「鶴彬」かほく市民川柳祭
- ◆ 第30回 鶴彬川柳大賞「展示＆表彰」
会場／高松産業文化センター大ホール
午後2時～5時
入賞・入選作品はフェスティバル会場に
鶴彬の句と共に行灯で展示
・表彰式前 「はまなすコーラス」と
「高松少年少女合唱団」の合唱

9/15(月・祝)

- 会場／高松産業文化センター大ホール
- ◆ 「でえげっさあ」コンサート
(白山市のフォークグループ)
 - ◆ 冬のト(ふゆのぼく)氏 講演
講題「鶴彬と大阪を歩けば」



折り鶴も集まりました。



冬のトさん
大阪あかつき
川柳会代表

フォーグループ
でえげっさあ

はまなすコーラス



後援：かほく市・かほく市教育委員会

通信
鶴彬

は ば た き

「鶴彬を顕彰する会」



第49号

2025年9月1日
鶴彬を顕彰する会

もくじ

- | | | | | | |
|------------------|-----------------------|--------------------------|-------------------------|---------------------------|---|
| 21 | 19 | 16 | 14 | 2 | 3 |
| 面 | 面 | 面 | 面 | 面 | 面 |
| 23 | 17 | 13 | 15 | 4 | 5 |
| 面 | 面 | 面 | 面 | 新連載
「なお闇にいる書」 | 新連載
「なお闇にいる書」 |
| 鶴彬
・交流
の広場 | 新情報
「衛戌拘禁所」
の内部 | 千羽鶴
を能登へ
「鶴彬のパネル展」 | 読書リレー
（第十一回）
武田裕一 | 第十八回
「戦争体験に学ぶ会」
即生寺 | 鶴彬川柳大賞
応募者100名増／第13回
「鶴彬のふるさと歴史街道フェスティバル」 |
| 24 | 20 | 18 | 17 | 6 | 7 |
| 面 | 面 | 面 | 面 | 新連載
「鶴彬と大阪を歩けば」 | 新連載
「鶴彬と大阪を歩けば」 |
| 財政の現状報告、編集後記 | 鶴彬資料室
「蔵書紹介」その① | 鶴彬の名前の由来
寺内撤乗 | 鶴彬の名前の由来
寺内撤乗 | 鶴彬の名前の由来
寺内撤乗 | 鶴彬の名前の由来
寺内撤乗 |

鶴彬川柳大賞

応募者100名増

第13回「鶴彬のふるさと歴史街道フェスタ」

—順調に進行中—

今年最大の企画「鶴彬川柳大賞30周年記念大会」の応募者が、昨年より100名上回る261名になり、嬉しい悲鳴を上げています。

今年も6名の選者により厳正な選句がなされますが、はたしてどんな句が選ばれるのか、今まで以上に期待と注目が高まっています。

また「30周年記念大会」では特別賞として6名の選者賞が用意されていますので、それにも皆さんの関心が集まる事でしょう。

受賞句の発表は9月14日の第27回鶴彬をたたえる集いの「碑前祭」で例年通り行われます。

今年は鶴彬川柳大賞が30周年を迎えることや戦後80年という節目の年でもあることから、テーマを「平和への願いを込めて」として出発しました。

その活動の中心として、折り鶴＝千羽鶴をみんなで作り、思いを一つにすることを考えました。この折り鶴の活動は8月いっぱい続きますが、びっくりするほど沢山の方々に参加協力をいただいています。



その様子は毎月発行している「折り鶴通信」に載せてあります。

千羽鶴は現在35本（3万5000羽）作られ、たかまつ交流館1階ロビーに飾られています。最終的には40本を超える素敵なお千羽鶴がフェスタ会場に飾られるることはもう間違いません。

実はこの千羽鶴は、能登半島地震の被災地支援活動にも役立てられています。私は2年目となる被災地へ月2回のペースで炊き出しのお手伝いに鶴彬を顕彰する会として参加していますが、すでに4か所の集会所に千羽鶴を持参し喜んでもらっています。メッセージカードには「がんばろう能登 心は一つ」と記し、共有の思いが伝わることを願つて贈呈に臨んできました。

8月9日（土）午後1時30分から佐々木禎子さんの紙芝居「原爆の子」をたかまつまちかど交流館1階「折り鶴教室」にて初披露しました。被爆した禎子と折り鶴の物語は、紙芝居とは言え胸が熱くなりました。語りは紙芝居歴20数年の越野正勝さんでした。



尚、今年の最優秀賞と優秀賞および佳作賞の受賞者には、特別な副賞が付きります。本人かご家族の方でなければお渡し出来ませんので、予めご了承ください。



たかまつまちかど交流館1階広場にて、
越野正勝さんによる紙芝居「原爆の子」と
「たかまつ少年少女合唱団」所属の3人の少女たち
の「折鶴」の歌を熱心に聴く皆さん。



「たかまつ少年少女合唱団」所属の3人の少女たちが鶴を折ったり、「折鶴」の歌を披露してくださいました。



高松少年少女合唱団の皆さん
(場所は浄専寺本堂)



はまなすコーラスの皆さん
(場所は浄専寺本堂)

●9月14日(日)は午後2時から、高松産業文化センター大ホールにて、「鶴彬」かほく市民川柳表彰式を開催いたします。
今年は表彰式の前に「はまなすコーラス」と「高松少年少女合唱団」の出演を予定しています。



てえげっさあ の皆さん (場所は浄専寺本堂)

●9月15日(月・祝)は午後2時から、高松産業文化センター大ホールにて、白山市のフォーケグループ「てえげっさあ」のコンサートと冬のト(ふゆのぼく)氏の講演「鶴彬と大阪を歩けば」を開催いたします。
なお、9月14日、15日ともに、折鶴を折るワークショップの開催を予定しています。

新連載 「なお闇にいる蓄」

「はまなす通信」より

今年は高松少年少女合唱団に9月14日(日)午後2時から高松産業文化センター大ホールにおいて歌つていただく予定ですが、その合唱団の主宰者は櫻井晴美さんです。

櫻井さんは「浜防風」というペンネームで『はまなす通信』(北陸中日新聞・かほく北販売店・麻生新聞店発行)に「なお闇にゐる蓄 戦後80年 節目の年に 川柳人鶴彬の願いは」という連載をしておられます。8月20日現在、「なお闇にある蓄」は、「はまなす通信」(6月8日発行)、Vol.207(8月10日発行)、Vol.208(7月13日発行)、Vol.209(8月10日発行)に掲載されています。

はまなす通信 (Vol.206~209)



なお闇にゐる蓄 ①

高松まちかど交流館の3階に「まちかど郷土資料室」があります。公共施設の中にあって、運営・展示などはすべて一般有志の手で行われています。10年以上前に開設され、交流館のリニューアル時などに模様替えをして、現在の形になりました。実は浜防風、この模様替えの折に、たまたまその現場に居合わせたのです。そして3階までの階段を使い(エレベーターがない!)、書棚か何か大きな物を数人がかりで運び上げる様子を目撃したのです。この5分程度の光景がなければ、「(資料室の運営面に大きく関わってらっしゃる)鶴彬を顕彰する会」の方々への印象は、全く違っていたかも、と感じます。

失礼ながら「一銭の得にもならないことには、よくこのように汗水流されるものだな」が正直なところでした。実際暑さで大変そうで、人生の先輩方もいらしたから、作業は休み休み。半分呆れるような思いが、尊敬の念に変わるために時間はかかりませんでした。

資料室、歴史街道フェスティバル、映画「鶴彬 こここの軌跡」、会報発行など、必要に応じて他団体と連携しながらの活動は多岐にわたります。今年は戦後80年、そして「鶴彬川柳大賞」が30周年となることから、9月にはさらに熱をこめた催しが企画されています。

本通信では数回にわたり「鶴彬を顕彰する会」「鶴彬」がらみの情報を発信していきます。鶴が命懸けで訴え、一生懸命な方々の心

なお闇にゐる蓄 ②

の中に生き続ける反戦・平和への願いを、さやかながら侧面支援していけたら、と。まず今回は(予定通りに発行できました)ちょうど明日から募集を始める「第12回『鶴彬』かほく市民川柳祭」作品募集のお知らせをご覧ください。はまなす川柳で磨いた腕前で!?是非ともご応募を!(「人を動かすのは眞実と感動」と固く信じてやまない 浜防風)

なお闇にゐる蓄

「鶴彬から読み解く日本の歴史」と題したA4十数ページにも及ぶ文章を書いたのは、なんと高松中学1年生(執筆当時)。昨年の「図書館を使った調べる学習」シンクールでかほく市の優秀賞に輝いた作品を転載したものです。

浜防風があれこれ解説するより、本当は皆さまに全文を読んで頂きたい(顕彰する会HPからご覧頂けます)です。時代背景を踏まえた鶴の生涯はもちろんのこと、顕彰する会の代表者や鶴の甥へのインタビュー、鶴の句への率直でみずみずしい感想など、イラストや写真を取り入れた力作です。

一番唸らされたのは、まとめというかとしての「感想」の部分。戦争を正当化していた世の中の流れを良く理解されたうえで、鶴彬はなんで洗脳もされず、同調もしな

かつたのか不思議だと思いました」と爽やかに結んでいます。

「自由で民主的」なはずの令和の世。しかし同調圧力が増して、何となく物を言いづらく感じるのは浜防風だけでしょうか。今こそ大事なポイントを突いているように思ったのです。

で、突撃取材（いい年して人見知りの浜防風を動かすとは、相当の感動だと）理解頂けますでしょ（心）いたしましたよ。その結果はまた次号にて。（「人を動かすのは眞実と感動」と固く信じてやまない 浜防風）

なほ聞にゐる薔

③

さて突撃取材。小心者で人見知りの浜防風、ドキドキしながら鶴彬に関する力作作者のおうちのインターホンを押しましたよ。ご本人はお留守でしたが、アポイントなしのいきなりの訪問にも関わらず、お父様に「対応頂きました。

機関誌掲載の作品にとても感銘を受けたことはまことに通信で取り上げさせてほしい」とを、しどろもどろに伝えました。そのうえで、時代背景に関してお父様がサポートされたが、あとは一人で作ったこと（顕彰する会で、「尽力されてるお父様の関りは、やはり気になるところでした、すみません）

・夏休み期間中に作つたこと（あれだけのものがひと月あまりで?と、失礼ながら要した時間を聞きました）

子がかほくにいるのだろうー！」と驚きました。

最後に是非聞いてみたかった」と、「なぜ鶴彬は時代に流されずにいられたのか？」について、ご本人のお考えをお父様経由で聞いて頂き、後日お返事頂きました。

「鶴彬はそんなタイプの人だった」との意見を詳しくいうと、

「みんなが当たり前だと思っていることにに対して、疑つてみると」の出来る人だった。そして正義感が強かつたので、黙つてはいられなかつた

とのこと。「なぜそれができたのか」についてを、お父様が補足され、

「幼少期から読書家で、文学のみならず政治哲学や世界情勢にも興味を示し、広範な視野と豊富な知識から、自分で考えることができたのでは。そのような知識人は進学して工リートコースを進むと国家や大企業の組織に組み込まれる。また家庭を持つと保身を考える。鶴は進学できず、貧乏で不安定な生活を

し、守るべき家族もいなかつた。川柳を武器に国民に向けて眞実を訴えかけ、戦争へ突き進む世の中の現状を何とか阻止できないかもがいていたのでは（一部省略あり）」

と解説。目の前の過酷な現実と、頭の中の理想の世界。たつた一人で何ができる、なんてことを思わずにはたすら突き進んだのですね。

なほ聞にゐる薔

④

鶴彬の思いを受け止め、今何ができるのでしょうか？

生来の気の短さから、毎日小さな戦争を繰り返している身には、世界の平和を願う資格が、まずありません。また、世の不条理、理不尽さを感じても、相手が大きすぎると、振り上げた拳を力なく降ろしてしまいます。若い頃の氣力がなくなつてしまつたのですね。

困つたなと思つていたところ、「これならできるかも？」の情報を見つけました。

鶴彬の「鶴」にちなんで、たかまつまち文化交流館で千羽鶴を折る催しがあるのです。主催は例の顕彰する会の皆さま。今年に入つてから月2回ペース（基本第2・4土曜日午後1時半から4時まで、飲み物代400円必要）で開催され、能登半島地震の仮設住宅へ完成品を届けたりもされているようです。折り紙は会で用意されています。どなたでも「参加頂ける」とのこと。

今まで作られた折り鶴を、まちかど交流館でいつでもご覧頂くことができます。それはまあ見事なもので。たくさんの手と思いがあつて、これだけのことができるのだな、と光のようなものを感じました。あえて言葉にするなら「希望」でしょうか。「折り鶴に寄せて」との詩、また「折り鶴通信」も、置かれていますよ。（本通信発行前の9日に参加し、禎子さんの「原爆の子」の紙芝居を見ているはずの浜防風）

新連載「鶴彬と大阪を歩けば」が始まります。著者は、高松歴史街道フェスティバル2日目の9月15日（月）に「鶴彬と大阪を歩けば」という講題でご講演いただきました。川柳作家の冬のトさんです。冬のトさんは今年一月に、大阪のあかつき川柳会の4代目会長に就任されました。

あかつき川柳会は2001年6月に設立された会で、大阪市天王寺区玉造に事務所を置いて活動しています。活動方針として『鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会風刺の精神を現代に生かし、川柳の普及と向上に努めることを目的とする』を掲げています。2008年9月に大阪城公園内に鶴彬顕彰碑を建立。毎月第2金曜日に定例句会を開催し、毎月1日には会報誌「あかつき」を発行しています。

実は新連載の「鶴彬と大阪を歩けば」はあかつき川柳会の会報誌「あかつき」からの転載です。「鶴彬と大阪を歩けば」の連載は、2022年7月202号から2023年6月213号の1年間です。連載開始時は、発行責任者は

「鶴彬と大阪を歩けば」 =冬のト(ぼく)=

岩佐ダン吉さんで編集人は塩田鮎子さんです。2022年11月号からは、発行責任者は加山勝久さんで編集人は塩田鮎子さんです。では、冬のトさんのプロフィールをご紹介いたします。

岩佐ダン吉さんで編集人は塩田鮎子さんです。2022年11月号からは、発行責任者は加山勝久さんで編集人は塩田鮎子さんです。では、冬のトさんのプロフィールをご紹介いたします。

はばたき第47号には、冬のトさんからいただいた手紙も掲載しています。

鶴彬と大阪を歩けば① 冬のト

第二次大阪大空襲があつた6月1日にピース大阪へ行つてきた。

戦後生まれが85%以上の現代、殆どの人が大阪に大空襲があつたことを知らない。自分でライメージを掴めない。ピース大阪で写真を見ると、想像を絶する廃墟の波を目にして、言葉を失う。露鳥戦争でウクライナの街の凄惨な被害のニュースを見て、我が町が破壊されるはどういうことなのか。その一端を垣間見ることができた。

戦後77年、幸いにも日本では戦争が起きた。しかし、世界では戦争が起き、それを政治の道具にしていたりする。国際法など在つて無いがごとの振舞い、一般市民の切なる願いをよそに早期停戦の努力を怠る両陣営。その犠牲になるのは、常に民間人だ。

不幸にも戦争が起き、戦況が混迷を深めると、簡単に攻撃が民間人にまで及ぶ。戦時下でも民間人保護に最善を尽くすという近代国際法が定着した現代においても簡単に民間人を攻撃する状況は太平洋戦争当時と変わらぬ

無実でも拒めぬ獄の飴と鞭 冬のト

冬のト

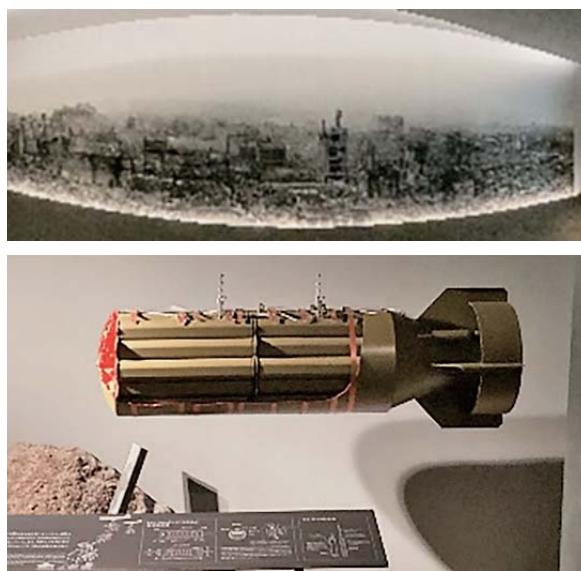
いことを、露鳥戦争でも露わとなつた。

鶴彬の心象は、当時、どのようなものであつたろうか。鶴彬が甦つたら、露鳥戦争を見て何と叫ぶであろうか。

正直に働く蟻を食うけもの

鶴彬

戦争を回避する努力を尽くさないといけないのは当然。それでも不幸にも戦争が起きたならば、民間人避難を最優先にすると同時に、早期停戦に最善の努力を尽くす責務が両陣営にある。



空襲の惨劇と焼夷弾

の近くにある。40年前の高校生時代、このあたりん地区は、日雇い労働者で活氣があつた。

当時、写真のあいりんセンターでは、建設作業等の日雇い労働の仕事を紹介し、最底辺の労働者を支えていた。ホームレスも少なくなく、最底辺の労働者の社会の縮図があつた。人夫出し事業を當む暴力団の関係企業も少なくなく、労働者から搾取しているという批判の声も少なくなかった。

あれから40年が経つて、久し振りにあいりんセンターを見に行くと、廃墟同然となつていた。



あいりんセンター

建物が老朽化し、耐震性にも問題があるのは、外観からでもわかる。建て替え工事の計画があり、賛否の議論がぶつかり合つて、計画は進んでいない。現在、南海高野線高架下に西成労働福祉センターが仮移転して、事業を継続している。

こうした人材を紹介する事業を行うには、その事業者は手数料的な金額を差し引いた上で、仕事を斡旋するのが一般的だ。問題は、差し引く金額が適切かどうかである。派遣労働者が激増した現在、派遣会社が花盛りで、あいりん地区の現状とは対照的だ。

その派遣会社では、仕事を斡旋するときの中抜き率が、事務系が15～20%なのに対し、技術系が30～最大50%にもなるという。あいりんセンターも目を剥くビックリ仰天のピンハネ率だ。専門職の派遣労働者は高い時給をもらうが、一般派遣労働者の時給は1000円前後で交通費が出ないケースも少なくない。この実態が、派遣労働者のワーキングブレーを生み出している。

搾取した金を貰うてゐるダラ幹 鶴彬

母校の今宮工業高校は、あいりんセンター

鶴彬が見てきた搾取の構造が、姿を変え、形を変えて、派遣労働の構造にゾンビとして棲息しているように見えてならない。

読書リレー（第十一回）

武田裕一

①『増補版 賃金破壊 労働運動を「犯罪」にする国』

竹信三恵子 句報社

以下（ ）の小題は私がつけたものです。
また（※）は私の注です。

（関西生コン事件）
(P35)

二〇一八年七月、近畿二府二県（※滋賀、和歌山）の警察が出動し、生コン運転手らの労働組合「関西地区生コン支部」（関生支部）での多量の逮捕が始まった。企業を横断した業界一斉ストライキなどの組合活動を、

威力業務妨害などの「犯罪」と見立てた「関西生コン事件」の始まりだった。逮捕された組合員は延べ八人にのぼり、うち六六人が起訴、という規模の大きさにもかかわらず、このできごとは、マスメディアからはほぼ黙

殺ってきた。（中略）
この国には、懸命に働いても賃金が上がりず、人間らしい生活が送れないことを固定化する「仕掛け」のようなものが張り巡らされている、（中略）

関生支部という労組は、そんな目に見えない仕掛けを跳ね除ける労働運動を現場からの創意工夫で実行し、そうした仕掛けをあぶり出す役割を果たしてきた。大量逮捕は、力でそれに蓋をしようとした。

ただ、いま、事件は大きな転回を見せつつある。裁判では無罪確定が相次いでいる。遠巻きにしていた人々も「これは変なのでは」とあやしみ始め、映画やテレビでのドキュメンタリー番組も放映された。そんな反転を生み出したのは、おかしいことはおかしい、と無罪を主張し続けてきた組合員たちの踏ん張りであり、労組での連帯の記憶に支えられたこの人たちの明るさと一種の「痛快さ」だつたと思う。（中略）

関生支部の組合員たちが直面したものは、私たちにとつて身近で日常的なものに転化しつつある。

一つが、事件の前段で起きた、ヘイトグループによるフェイク情報のばらまきだ。そ

れが組合のイメージを落としてその反論を封じ込め、メディアの敬遠を作り出した。二〇二四年の衆議院選挙や兵庫県知事選では、こうしたSNSという道具による情報拡散の危うさが、前面に躍り出た。

二つ目が、逮捕後の組合員に対する警察・検察の取り調べの異様さだ。そこでは、事件の究明より、組合からの脱退に追い込む極端な長期勾留が行われた。当時、そんなことはあるはずがない、と言われ続けたこの行為は、この間、他の事件で「人質司法」として注目され、取り調べ録画などを通じた取り調べの可視化が進みつつある。

三つ目が、物価高の中での賃金の低迷と生活苦の深化の中でのストライキなどへの支持の高まりだ。たとえば二〇二三年の西武百貨店ストは世論の共感を呼び寄せ、生活防衛へ向け、ストを辞さない労組がその後、相次いでいる。

※関西地区生コン支部（関生支部）とは生コンクリートを建設現場に運ぶ運転手などを組織する「全日本建設運輸連帯労働組合」を縮めて「全日建」と呼ばれることもあり、愛称風に「連帯ユニオン」と呼ばれることもあります。そんな「連帯ユニオン」のメンバーのう

ち、大阪、滋賀、京都、和歌山などの近畿地方の生コン企業の運転手らが加入するのが「関西地区生コン支部」略して「関生支部」

(企業別労組と産業別労組)

(P 23)

労組には企業ごとの「企業別労組」と、産業全体をカバーする産別労組（※産業別労組）がある。日本の労組の大半は企業別労組が基本単位だから、産別労組は、個々の独立した企業別労組のネットワークのようなものが少くない。一方、海外の産別労組は、日本

のような企業別労組の集合体ではなく、業界内の労働者が直接加入するのが基本だ。労働者は、この産別労組を通じて、雇用されている企業の経営者たちや業界内の経営者集団と交渉することになる。

連帯ユニオンは、セメント、生コン、砂利などを建設現場に運ぶ運転手や、クレーンなど重機のオペレーターが個人で加入する全国規模の産別労組である。関生支部はその中心的位置を占める支部だ。

日本では先に述べたように、ほとんどが企業別労組だ。ここでは、「ほかの企業との競争に負けるから待遇改善は無理、負けたらお前の仕事もなくなる」と言われ、そうなると、労働者はモノを言いにくくなる。業界全体が同じ労働条件で働くことになる産別労組では、そうした企業側の言いわけは通用しない。同一労働同一賃金も保障されやすい。

(P 34)

労働運動が「犯罪」になつた

(P 27・28)

労組といつていい。ちなみに日本の労働組合法では、企業別も産別も労組として認められている。

(労働運動が「犯罪」になつた)

(P 53)

一九九四年に隔週週休二日制が実現した。「シングルマザーが自立できる労働条件」は、それらの積み重ねの結果だつた。

(P 137・138)

（※関生生コン事件では、労組の活動に対して「指示・計画」したトップが実際に逮捕された。）それを可能にしたのが、先に述べたような、労組の活動を「暴力団の手法」に置き換え、労働用語をひとつひとつ暴力団の用語に置き換えていく方法だ。そこでは、「環境整備費」「解決金」が、「みかじめ料」になつただけでなく、労働基本権の行使が「金品獲得のための嫌がらせ」となり、ストなどについての労組の決定は、武委員長という「組長」から末端「組員」への指示となり、罰せられるべきは現場にいなかつた委員長、ということになる。

(P 33)

（※関生支部は、）安値労働に依存するのではなく、労組の監視を通じて業界全体で労働時間の順守を励行し、質の高い労働を担保する連帯ユニオンや関生支部は海外の産別労組に近い。日本社会では珍しい国際基準の産別

(ストライキは迷惑?)

(※一〇二〇年二月一五日、国際人権法研究者の申^{シン}^{ヘボン}・青山学院大教授「検証シンポジウム『関西生コン事件』を考える」で)

(P 246)

申の説明のなかで特に印象に残つたのは、「ストライキは業務を止めて、いわば相手に迷惑をかけるということで成り立つ行為」と言う言葉だつた。「迷惑をかける」ことで成り立つ行為について人々が「迷惑」と切り捨てたら、ストをする意味がなくなつてしまふ、

というのである。実際、フランスなどではストライキは頻発しているが、国民はそれを受け入れている。日本人は、幼いころから「迷惑をかけない」ことばかり教え込まれ続け、何が自分の権利なのかを意識できなくなつてゐる。権利を守らせる行動を起こさないと、悪い前例ができて、権利は消滅してしまう。だからフランスの人々は残業を禁止する規定があるなら自身も残業を断るなど権利行使することは義務だと考える、というのだ。

デイアに関わる者たちの責任を問い合わせ、国賠訴訟を通じて「本気の労組」への国の対応を白日の下にさらし、さらにゴーン元会長などへの「恣意的拘禁」に対する国際的な注目にも押されて、忘れられかけていた産別労組についての理解の扉を押し開けつつあるのではないか。「貸下げ国家日本」の真ん中で、私は、さびついたその扉が、きしみながら開きかける音を聞いたような気がした。

(P 263・264)

この事件(※関西生コン事件)はまず、どこのかの「ステキなよその国」でなく、私たちの社会にも、働きにくさをしつかりと押し返してきた労組の活動があるということを教えてくれた。さらに、そのための強力な武器である労働基本権を「犯罪」に作り替えていくための周到な詐術が、當々と続けられてきたことも、教えてくれた。

日本での過労死をもたらすような長時間労働や、貧困に直結する低賃金は、この詐術によつて、多くの労働組合がまるで会社の中の「部」や「課」のように押し込められてきたところから来ている。それなのに私たちは、「日本人は働くのが好き」「低賃金でも我慢して働く奉仕の精神がすばらしい」と、思われるかもしれない。それは、労働法研究者たちの危機感に火をつけて「声明」を誘発し、メ

され続けてきた。

この本は、そうしたからくりを解き明かしたくて書いた。

2 「愛と連帯

非正規労働者、国会へ

大椿ゆうこ 地平社
(フリーターは無職といつしょ)
(P 13)

「(※お姉ちゃんは)『フリーターは無職といつしょ』と言うけれど、お姉ちゃんの会社にもパートやアルバイトの人はいるよね? 正社員だけでは仕事が回せないから、会社はその人たちを雇つていて。本来であれば正社員で雇うべきところを、非正規雇用で雇うこととしたのは会社の都合でしよう? だつたら会社の問題じゃない? なんで、非正規雇用だからって、ちゃんと働いている人たちのことを蔑むの? その人たちが働くことで、お姉ちゃんの会社は回つてんだよ?」そう言葉にできたのは、あの出来事からしばらく経つてからのことだった。いま振り返ると、このときの体験が、私が非正規雇用の矛盾に向き合う最

初のきっかけだった。

(生きていた労働組合—次の勝利のために)

(P158)

私は障がいのある学生の就学支援コーディネーターという仕事をしていましたが、上限4年の有期雇用を理由に雇い止め解雇されました。

(P29)

2009年2月、もう一人のコーディネーターとともに、大阪市・天満橋にある教育合同(※教育現場の労働者なら誰でも一人から加入できる労働組合、大阪教育合同労働組合)の扉を叩いた。

(初めての団体交渉)
(P32・33)

私は初めての団体交渉に臨みながら、「ああ、これが憲法28条が言うところの団体交渉権か!」と感動した。

だが、数回にわたった団体交渉のなかで、大学側からは数々の冷たい言葉を浴びせられた。なかでも印象に残っているのは、常任理事が言い放った「有期雇用は自己責任」という一言だつた。その一言に、団交に参加していた組合員らがいつせいに抗議しはじめ、場は紛糾した。私のために怒りをあらわにする仲間の姿が心強かつた。常任理事が言い放つた「有期雇用は自己責任」という言葉は、本

話を終えて立ち上がると、扉を開けてくれたYさんが、またしてもこんなことを言つた。「大椿さんのときには勝てないかもしれません。でも次の人のときには勝てるかもしれない。それが労働運動だからね」と。その瞬間、バキューンと胸を打たれるような衝撃を受けた。「かつこいい!私も闘いたい!」と心が叫んだ。労働組合に入つて闘おう、ほぼ気持ちが固まつた瞬間だった。

(分断)
(P35)

私たちの代わりに公募で採用された一人は、一緒に働いていたアルバイトの女性だつた。公募の条件が、私の採用時に比べて緩和されていた理由に合点がいった。関学は、最初から彼女を採用することを前提に公募をかけたのだと気づいた。「一緒に働いていたアルバイトなら、仕事内容もわかるだろう」と

考えたのだろう。「立ち上げから関わったコールバイトなら、立派な人だ」と思って採用された。不安があつたことが垣間見える。そんなに不安なら、私たちを継続雇用しておけばいいだけなのに。採用された彼女を責める気はない。ただ、共に働いていた同僚との間に、平気で分断を持ち込んでくる男たちのこのやり方に怒りを覚えた。有期雇用の問題点の一つは、このような恣意的な人事がまかり通るところだ。

ターという仕事を有期雇用としたのは関学だ。それで人を募集しておいて、異論を唱えた者には「有期雇用を選んだのは自己責任」だと突き放す。あまりに自分勝手ではないだろうか。障がい学生支援コーディネー

「有期雇用をおかしいと思う大椿さんの直感は間違つていませんよ」

初めてだつた。そんなことを言つてくれた人は、親にも姉にも、職場の上司にも友人も、「今さら文句を言うあなたがおかしい」と言われづけてきた私は、自分の違和感に確信をもてないでいた。Yさんのこの言葉に、私は心から救われた。

(争議で培つた力)

(P 38 ~ 40)

私の労働争議は3年9ヶ月かかり、大阪府労働委員会に続いて中央労働委員会でも棄却され、2013年に終結した。結局、私は職場に戻ることはできなかつた。

だが、この過程でたくましさを培つた。とことん闘つた私が感じたのはすがすがしさだつた。それからは教育合同の専従役員として、本格的にさまざまな労働相談に関わることになつた。

私は主に、私立大学・民間で働く非正規労働者の相談を担当した。非正規労働者の中心は女性だ。それゆえに、女性たちの労働争議を担当することが多かつた。団体交渉を前に緊張した組合員が、「私、何も喋れませんから大椿さんにお任せします」とうつむく。「わかりました。でも話したいことがあつたら言つてください」と彼女たちに伝える。かつて私がYさんからそう言われたように。緊張でただただ黙つている彼女たち。解雇しようとする使用者は、いかに彼女たちに問題があるか、あることないことを饒舌に語りだす。すると、彼女たちの表情が徐々に変わりはじめる。そして、スクツと背筋を伸ば

し、怒りを滲ませながら、もう我慢できない、とばかりに、怒涛の反論が始まるのだ。

私はその瞬間が大好きだ。「今、この人は自分の権利と尊厳のために立ち上がつたんだ」、そう感じる瞬間に間近で立ち会えたとき、私は労働運動の醍醐味を感じる。(中略)

私は勝つことはできなかつたが、その闘いが新たな闘いを支え、勝利を導いている。つまりこれが労働運動なのかもしれない。

(国会議員に―労働問題にこだわる)

(P 51)

(※2019年の社民党参議員全国区比例名簿の繰り上げ当選により) 2023年4月7日、私は参議院議員になつた。クビを切られた非正規労働者が、ついに国会議員になつた。

自分のが国会のなかで一番やりたいことは「非正規雇用の入口規制」を法制度化することだ。労働契約法18条は、同じ職場で5年を超えて働く有期雇用労働者は、本人の申し出によつて無期雇用に転換できると定めている。使用者側はそれを断ることはできない。このように正規者を無期雇用に転換することを「出口規制」という。(※雇用期間を迎える直前に契約更新を打ち切る「無期転換逃れ」があり、有期雇用契約のルール撤廃を求める動きもある)

しかし、この国に「入口規制」がない。そもそも非正規労働者を増やさないための方法がないのだ。その結果、本来は正規で雇うべき恒常的な仕事を非正規雇用にしている。公

そうなるのは当然だ。少子化の最大の要因は、非正規雇用の拡大に決まつてゐるだろう。

(P 61)

正規雇用であれ非正規雇用であれ、立場の弱い労働者がどれほど不条理な扱いを受けているのか。それを可視化し、国にたどすのが私の使命だと思っている。労働者の使い捨ては絶対に許さない。私はこの一議席を、徹底して労働者のために使うつもりだ。

(P 88 ~ 89)

私が国会のなかで一番やりたいことは「非正規雇用の入口規制」を法制度化することだ。労働契約法18条は、同じ職場で5年を超えて働く有期雇用労働者は、本人の申し出によつて無期雇用に転換できると定めている。使用者側はそれを断ることはできない。このように正規者を無期雇用に転換することを「出口規制」という。(※雇用期間を迎える直前に契約更新を打ち切る「無期転換逃れ」があり、有期雇用契約のルール撤廃を求める動きもある)

しかし、この国に「入口規制」がない。そもそも非正規労働者を増やさないための方法がないのだ。その結果、本来は正規で雇うべき恒常的な仕事を非正規雇用にしている。公

務職場で働く会計年度任用職員（1年単位で雇われる非常勤職員）がよい例だ。その仕事アルバイトで雇うのか、パートで雇うのか、派遣で雇うのか、その判断は使用者側が握っている。これでは非正規労働者の拡大に歯止めをかけることはできない。

・パタゴニア争議原告の藤川瑞穂さんの言葉「働くための入口は有期雇用契約しかない。それなのに、あなたの自由でやつた契約ですよね、って言われるのは、ものすごい欺瞞だと思う」（P 159）

・ライター和田静香さんの言葉

「非正規・有期雇用というのは、『選択させられている』んですね」（P 185）

（弾圧される労働組合——関西生コン事件）

（P 113）

「国会議員になつて良かつたなー！」としみじみ思うことがある。厚生労働委員会に所属していることもあって、ガンガン労働問題について質問ができるからだ。関生支部への不当弾圧についても質問をした。

（P 117）

関生支部は強力な運動を展開してきたが、決して労働運動として特異な存在ではない。

むしろ欧米の水準で言えば産業別労働組合として、労働運動の王道を歩んでいたと言つていい。悪いことなど何もしていない。裁判で無罪判決が続いているのは当然だ。だからこそ、声を大にして、この弾圧のおかしさ、異常さを追及していかなければいけない。そうでなければ、憲法28条で定められたはずの労働三権（※ 団結権・団体交渉権・団体行動権）を、私たちは失つてしまふかもしれないのだ。

でも、「私はこの社会から大切にされなかつた」って思つてほしくないんです。非正規雇労働者や女性たちに。だからこそ、国会には当事者が必要だと思うんです。非正規雇用を経験してきた当事者が。解雇を経験してきた当事者が。女として生きづらさを感じてきた当事者が。女性議員をもつと増やすことで、女性の抱える問題に取り組む人を増やすことができると思うんです。

（国会には当事者が必要）
（P 202）

れる社会をつくりたい。

私たち労働者は、もつと大切にされなければならない。労働者を使い捨てにする政治を終わらせるために、私は、これからもとことん闘います。

（P 207）

私が長生炭鉱の問題にこだわっているのは、これが労働問題だからだ。外国人なら何をしてもいい、どんな過酷な仕事をさせてもかまわない、死んでも知つたことではないという日本の姿勢は、現在の奴隸労働と言われる外国人技能実習制度に引き継がれていると思うからだ。強制労働の歴史を総括していく結果が、今に続いている。私はそれが許せない。憲法28条はすべての「労働者」がその対象だ。私は国籍や人種を理由に差別されることを許さず、すべての労働者の権利が守ら

※大椿裕子さんは2025年7月の参院選で社民党から全国区に立候補しましたが、59279票獲得するも社民党一人目の議席獲得はなりませんでした。しかし、これからも労働人たちの使い捨てを許さない闘いは続けると思います。

第十八回

『戦争体験に学ぶ会』

(かほく市内高松 即生寺)

北朝鮮からの逃避行

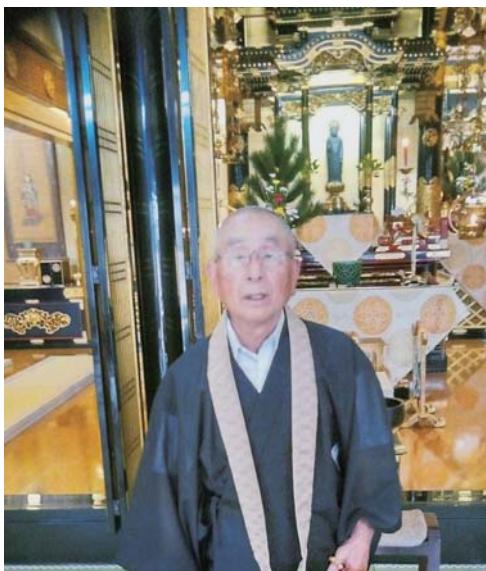
去る七月二十日、かほく市内高松真宗大谷派即生寺にて「戦争体験に学ぶ会・全戦争犠牲者追悼法要」が今年も開催された。

第一部戦争体験に学ぶ会では、当寺前住職（松尾正寿）が、八十年前の終戦直前、二十一歳で北朝鮮清津府の中学校教員に成りたての坊城百合子さんがソ連軍侵攻から逃れ、九か月半恐怖や飢えや病に苦しんだ逃避行の模様を、同氏著「曲がり角に菩薩」を基に語つた。その一部分を以下に記す。

やがてちゃぶ台に炊き立てのご飯と熱い味噌汁、人参の味噌漬けが並んだ。一か月近く流浪して来た身には夢のようなもてなしだった。人参の赤い色がまぶしい程に美しく、ご飯も味噌汁も湯気を立てていた。難民の私たちのためにわざわざ揃えて下さった情けが身に沁みて涙が出しそうだつた。

部屋いっぱいに蒲団が敷かれた時には皆、声も出ないのでした。畳でさえ撫でて喜んだのに、綿の布団で身体を休められるとは！ ついで去った家庭の温もりが夢のようだつた。

私は床に就くなり氣を失つたのであろうか、それから三日間は昏睡状態になつたようである。意識が朦朧として霧の中をさまよい、ただ朝出かけては夕方帰つてくる人の気配をおぼろげに感じていたような気がする。



即生寺 前住職 松尾正寿

池里さんとの出会い 文坪にて

見ず知らずの六人を池里さん夫婦が、「さあ、さあ」とまるで待つてでもいたかのよう

に迎え入れて下さつた。立つてているだけで精いっぱいの私が、池里の小母さんの温かい晴れやかな声をどれほど嬉しく懐かしく思つたことか。池里さん一家は夫婦と十代の子供三人、家は二部屋に台所の鉄道員官舎で、私たちは笑き当たりの六畳間に通された。

やがてちゃぶ台に炊き立てのご飯と熱い味噌汁、人参の味噌漬けが並んだ。一か月近く流浪して来た身には夢のようなもてなしだつた。人参の赤い色がまぶしい程に美しく、ご飯も味噌汁も湯気を立てていた。難民の私たちのためにわざわざ揃えて下さった情けが身に沁みて涙が出しそうだつた。

部屋いっぱいに蒲団が敷かれた時には皆、声も出ないのでした。畳でさえ撫でて喜んだのに、綿の布団で身体を休められるとは！ ついで去った家庭の温もりが夢のようだつた。

私は床に就くなり氣を失つたのであろうか、それから三日間は昏睡状態になつたようである。意識が朦朧として霧の中をさまよい、ただ朝出かけては夕方帰つてくる人の気配をおぼろげに感じていたような気がする。

明日にはどこかの道端で倒れてそのまま落ちていくのだろうか。二度と浮かび上がれない果てしない無限の闇へ。でも自分にはもう生きるための術が無い。医者も薬も食べ物も

煌々と差し込んでいる。今夜は満月なのか。仲間たちがぐつすりと眠つてゐる。

一体私はどれだけ眠つていたのだろう。思いがけなくも池里さんのご厚意で夕飯を戴き、蒲団に身を横たえてから長い時間が過ぎたような気がする。今は物音ひとつなく、家中もしんど静まり返つてゐる。この世の全てが眠つてゐるような深い静寂。この月明かりの中で、私は自分の死が近いことをひしと感じた。清津を脱出してからの有為転変は極まりなく、逃避行を重ねた末にこうして見知らぬ町で病み倒れた。父も母も、兄も姉も、弟も妹も友達も、誰一人として知られずに死ぬのか、と思つた時不意に涙が溢れ出た。そして「死ぬのはイヤ、死にたくない」と声を出さずに叫んでいた。毎朝神仏を拝んで育つたことは何の救いにもならず、怒涛のような悲しみの中で、ただひたすらに恐ろしかつた。絶望の端から底の見えない谷を覗き込むようなゾッとする恐怖に震えた。死とは黒一色の闇、その闇の深い空洞に一人で落ちていくこと。

身寄りも。底なしの泥の中に呑み込まれていく孤独と絶望で、蒲団に顔を押し付け声を忍ばせて泣いた。

どのくらい泣いていたのか、三日間休んでいた腎機能が働きだして、そろそろと立ち上がりよろめきながら用を足しに行つたその帰り、廊下のガラス戸を通して池里さん一家の寝姿が見えた。何と。座布団やコートを被つて横になつておられる。座布団一枚では足も肩も出る。コートも身体を覆うことは出来ない。自分たちの蒲団を全部難民に着せて、一か五人がこの北朝鮮の秋の夜を手足を縮め背を丸めて眠つておられる。

夜が明けてから皆に昨夜目にした池里さん一家のことを話した。皆うつと絶句し、目を伏せてうつむいた。

朝ご飯をいただいて終日汽車を待ち、また帰つてきて夕ご飯をいただき蒲団で寝る。それがどれ程申し訳なく心苦しいことか十二分に分かつてはいても、つかの間の安寧から再び恐怖と苦難の逃避行に踏み出すには勇気が要つた。

でも、もうこれ以上甘えてはいけない、皆で出よう、と話し合いはすぐに決まつた。

一人ずつ手をついて礼を言った。お礼の言葉をよどみなく述べる人、声も出せず深々と頭を下げる人、だれも皆感謝の思いは言い尽

くせない。池里さんの一家も並んで座り、目礼を返して下さった。小母さんが「どうか元氣で内地に帰れるように祈つてるよ」と言われるなり

「まさとし！お前、そのシャツを脱げ！」側に座つている息子さんの木綿のワイシャツをむしり取るようにして脱走兵に着せられた。

私はもう野垂れ死にを想つて泣いた昨夜の私ではなかつた。私の魂は池里さん一家の慈悲の心に触れて淨められ、澄んで平安になつていて。最後に私が手をついて御札を言おうとした。感謝の言葉は胸に溢れ、ほんんど声にならなかつたが、その時突然

「父ちゃん！この姉ちゃんを助けて！」

小母さんが悲鳴のように叫ぶと、同時に身を投げ出して畳にひれ伏した。それからゆるゆると体を起こすと、自分に言い聞かせるかのようにゆつくりと言つた。

「おかゆをすすつてでも、この姉ちゃんを、一緒に内地に連れて帰つてちょうだい、おねがいします」

異国に残された敗戦国の民には今後どれ程の苦難が待ち受けているのか、想像することも出来ない。明日にはこの官舎を追わされて自分たち一家も逃避行の旅に出るのか、無形の鎖につながれてこの異国を流浪するのか。こ

んな時に死に瀕した病人を抱え込めばそれほど家族の暮らしが圧迫され痛い犠牲を強いられるか、叔母さんは存分に分かつていながら、それでも救わずにはおれないという慈悲の心を身体いっぱいに現わして、真剣にそして悲しげにじつと小父さんを見つめていた。

この光景は私の生涯を通しての心の灯となつてゐる。私が浄土に還る時は最後に必ずこの時の事を思うであろう。

こんなことがあろうか。誰もが凝然として沈黙した。この極限の非常時に、見ず知らずの病人をだれが抱え込めようかピンと張りつめたその空気と時間を断ち切るように

「よし！ 今日から家の娘だ！」小父さんが決然と言われた。・・・・・

坊城百合子さんは、飢えに耐え、マラリヤ再発にも打ち克つて昭和二十一年両親の郷里石川県に引き揚げる。

大正十二年（1923年）羽咋郡出身の両親のもと植民地北朝鮮清津に生まれる。

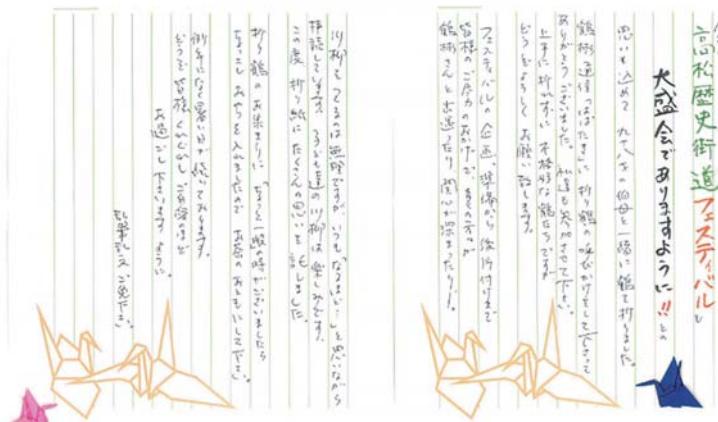
昭和十八年（1943年）九月、広島県立広島女子専門学校卒業。

昭和二十五年（1950年）石川県立高校教員となる。

昭和五十三年（1978年）石川県立女子専門学校退職。

レポート① 平和と復興への祈りを込めて 折った千羽鶴を能登へ

鶴彬を顕彰する会では、今年の2月からたかまつまちかど交流館で「折り鶴教室」を開いています（詳細ははばたき48号をご覧ください）。様々なグループや個人のかたが協力してくれて、千羽鶴もたくさん出来上がりました。また、福島在住の石井いづみさんからもお手紙とともに折り鶴が届きました。ここに紹介させていただきます。



石井いづみさんからいただいたお手紙

今年の高松歴史街道フェスティバルも大盛会でありますように!!との思いも込めて九十八才の伯母と一緒に鶴を折りました。
鶴彬通信「はばたき」に折り鶴の呼びかけをして下さってありがとうございます。上手に折れずに不格好な鶴たちですがどうぞよろしくお願ひ致します。

フェスティバルの企画、準備から後片付けまで皆様のご尽力のおかげで、多くの方々が鶴彬さんと出遇つたり、関心が深まつたり。

川柳をつくるのは無理ですが、いつも「なるほど」と思いながら拝読しています。子ども達の川柳は楽しみです。この度折り紙にたくさんの思いを託しました。（中略）例年なく暑い日が続いております。どうぞ皆様くれぐれもご自愛のほどお過ごし下さい。乱筆乱文で免下さい。

石井さんからいただいた
折り鶴

さて、顕彰会の事務局である遠田、喜多、平野は昨年に引き続き、今年も炊き出しのボランティアのお手伝いに、輪島市門前町の仮設住宅や公民館に行ってています。今年はボランティアに行くのに折り鶴を持参して被災地の皆さんにお渡ししております。



6月10日 道下第2仮設住宅集会所





8月21日 浦上公民館（あすなろ交流館）

私たちいきなり千羽鶴を渡すのではなく、まず「折り鶴通信」をお渡しして、どこでどのような人たちがどんな目的でこの折り鶴を折ったのかを丁寧に説明し、ご迷惑にならないかを確認した上で千羽鶴をお渡しするようにしております。

(平野記)



反戦川柳作家 鶴彬パネル展

レポート② 石川県庁19階で 鶴彬のパネル展

当鶴彬を顕彰する会は、戦後・被爆80年 平和を願うネットワークの呼びかけに呼応し、

8月1日（金）～15日（金）石川県庁19階展望ロビー・交流コーナーを会場にした「平和のパネル展」等の多彩なイベントの開催企画の一環として「反戦川柳作家 鶴彬パネル展」（12枚のパネル）として参加しました。



反戦川柳作家 鶴彬パネル展

同会場・同期間に、日本中国友好協会石川支部の村瀬守保写真パネル「一日本兵が撮つた日中戦争」と治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟石川県本部の「治安維持法制定100周年パネル展」も併せてありました。2週間の開催期間中に多くの県民に見ていただきました。

(板坂記)

「鶴」は一般的に恩師 井上剣花坊・信子夫妻の次女＝鶴子からといわれているが、「彬」は、地元高松で以前から言い伝えられている説がある。

鶴彬の名前の由来

寺内 撤乗（鶴彬を顕彰する会会員）



「彬」に本名が隠されている

鶴彬（本名・喜多二二）は、デビュー時、「喜多一児」というペンネームを使用しているが、特高警察に目をつけられたが、ようになつた時期、一瞬

「山下秀」を名乗り、最終的には「喜多一児」を捨て、「鶴彬」を名乗つた。

「鶴」についてはここでは割愛し、「彬」についての面白い説があるので、簡単に紹介したい。

「彬」は、現在では中尾彬や大仰彬など有名人の名前にもみられるが、鶴彬以前に生まれた有名人といえば薩摩藩主の島津斉彬しかみられない珍しい漢字である。鶴彬が、なぜわざわざ当時として

の答えは意外な所にあった。

何年も前のことだが、誰に教えてもらつたかははつきり覚えていないが、川柳をしている或るご年配の方から「彬」に鶴彬の本名である「喜多二二」が隠されていることを教えてもらった。

「木」が二つで「キ・多」つまり「喜多」、「三」で「一二」となる。その説明を聞き、私は「なるほど」と思った。

では、その方がこれの発見者かといえば、そうではなく、その方も何年も前に知人が見つけたのを知人から教えてもらつたとのことで、今となつては誰が第一発見者なのか分からぬ。鶴彬は「鶴彬」の中に「喜多二二」を残しながらも、世の中に「俺の正体を暴いてみろ」という「なぞ解き」を出していたのかもしれない。

(ヒツヂ テヅヨウ)

平和や環境保護、人権をテーマにスタッフ一団で、創業以来六〇年の「富士国際旅行社」で、能登地震をきっかけに、能登への旅行を斡旋し志賀原発、珠洲原発跡地、内灘米軍試射場跡地などを案内し、高松の鶴彬資料室も訪れる。

創業者は終戦時の玉音放送を担当した元日本放送協会の柳沢恭雄氏。経営理念は「平和な世界、民主的な社会の実現に貢献」。社員は4人。沖縄への高校の修学旅行の添乗もする。最近では台湾海峡・金門島にも足を伸ばす。先年被曝者が国連軍縮特別総会で演説した海外活動なども長く陰で支えた。この旅行社への情報提供に内灘町の元町議会議員・水口裕子さんも協力、鶴彬資料室は終戦の報道の點を強調して、平和と環境、人権がテーマのスタイル。リーフレットは被曝者の玉音放送を担当した「ひと」を題材にした。2014年12月6日付の朝日新聞の記事によれば、「ひと」は被曝後の玉音放送を担当した「平和な世界、民主的な社会の実現に貢献」という意味で命名された。



鶴彬資料室も案内する 『富士国際旅行社』

▼写真は朝日新聞「ひと」欄で紹介された社長の太田正一さん(56)。

II 新情報 II

鶴彬が収監された「衛戌拘禁所」の内部

えいじゅこうきんしょ
〔衛戌拘禁所〕

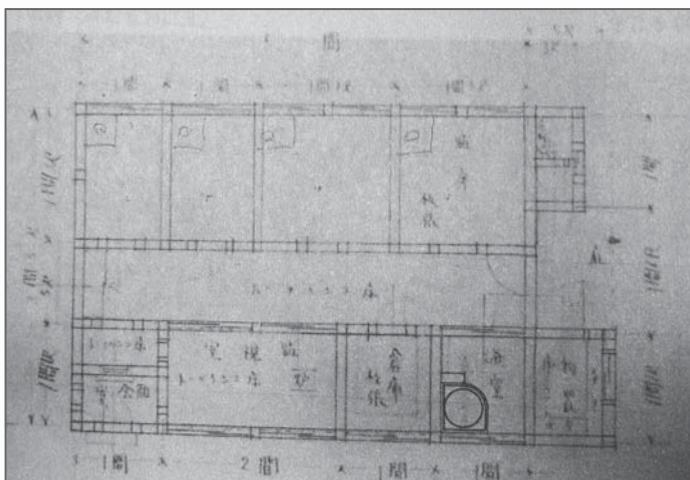
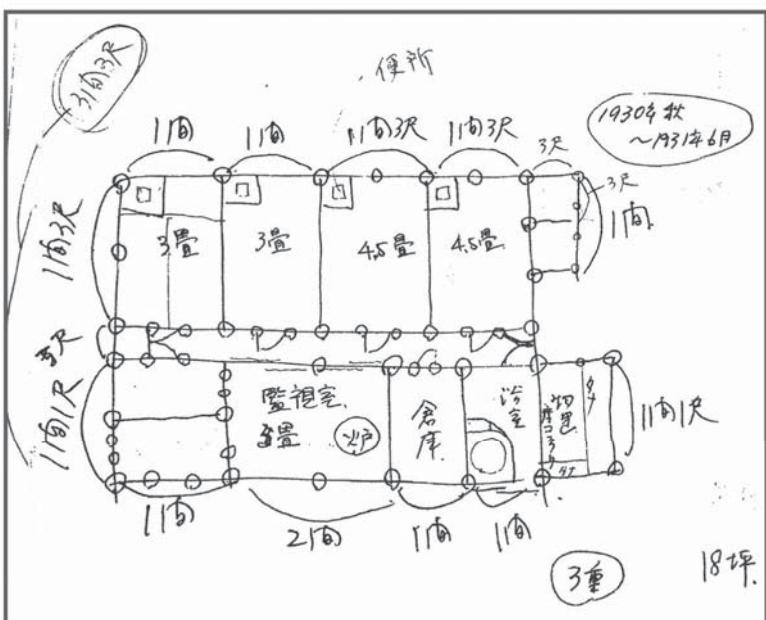
の 内 部

元金沢城跡は戦時中、日本陸軍の第九師団、歩兵七連隊があつた。戦後、第四高等学校（金沢大学）となり、城跡の大学として世界的にも希有で、多くの学者や文化人を輩出した。

喜多一二（鶴彬）が反軍活動で逮捕され拘束、拷問などで調べられた「衛戌拘禁所」は二重の塀に囲まれツタに覆われ、大学が移転し金沢城公園として整備されるまで大学の施

設として使われていた。最近知人からこの施設で動物実験をしたことがあると連絡があり、「衛戌拘禁所」の内部の図面を書いてもらつた。

建物は18坪。入口から中央に3尺（1m弱）の廊下があり、右側に四畳半の個室2、三畳の個室2。左側に浴室、監視室、倉庫などがあり、浴室には1mほどの五右衛門風呂があることが分かる。



こんな姿で建っていた元衛戌拘禁所（1987年）

この元衛戌拘禁所は1993年金沢住宅地図に「法文学部心理理学研修室 動物実験室」とあり、その後金沢城公園整備によつてこの場所に金沢城公園トイレが設置された。

鶴彬が衛戌拘禁所に入れられたのは、1930年3月の「連隊長質問事件」、翌31年「金沢第七連隊赤化事件」で収監、この事件で大阪衛戌監獄に移監（刑期1年8ヶ月）。大阪の衛戌監獄は大阪城内にあり、大阪城公園整備に伴い、大阪あかつき川柳会の努力で鶴彬顕彰句碑が建てられた。刻まれた句は「暁を抱いて闇にゐる蓄」（W）



創刊号（A5判24頁）1960年2月
が保管されてます。

鶴彬資料室 藏書紹介

その① 「諷詩人」（石原青竜刀）

「鶴彬資料室」は鶴彬に連した膨大な第一級史料が保管されています。特に戦後すぐに鶴彬の存在が世に紹介されるきっかけになつた様々な出版物が保管され、戦後川柳史を知る上に欠かせないものがたくさんあります。国立国会図書館にもなく、高松の資料室にしか残されていないものもいくつかあります。

「諷詩人」

（創刊号～54号）

これは1960年創立された諷詩人同盟の機関誌である。ガリ版刷り。

「諷詩人」は彼の死後の1979年9月5日で廃刊することになる。



資料室には「諷詩人」の創刊号から54号（1979年）が保管されて

州鐵道系列の華北交通に勤務し、中国の文芸誌に執筆。戦後帰国し多くの文芸誌に川柳欄の選者などしていた。日本文化についての造詣が深く、「川柳の神髄は風刺にある」として、「諷詩」の呼称を提唱。民族短文芸の最高峰をめざし「俳句でも川柳でもない川柳非詩論」を展開。「諷詩人同盟」を設立、多くの賛同者を得た。また1969年「よみうり時事川柳」の選者となり、伝習の定型にこだわらぬ、型よりも内容と精神、その句にふさわしいリズムを有しているかを選考基準にして、多くの新人を育てた。しかし既存定型川柳界からの批判もあり、1978年3月新聞社当局より「4月から紙面刷新をはかるため」の宣告で選者を去る。

彼の残した「諷詩人」は彼の死後の1979年9月5日で廃刊することになる。

- 東洋の盟主ださうな千鳥足 （1931）
- 徳はなし況んや言語不通をや （1931）
- 落書きも支那は一首の詩をしるし
- （日本の丘陵が中国に行つて驚いたのが落書き。どれも見事な筆跡の詩であったという。）
- 「考えない葦」ジグザグとせめられる夢ならぬ過去や黄土のしみいくばく
- 神武以来食えぬ人あり放つとかれ



石原青竜刀（1965 金沢市にて）

います。この資料は故岡田一杜氏本人から鶴彬資料室完成の際、寄贈されたものです。この資料は川柳や川柳史を理解するために必見の資料である。

石原青竜刀の川柳

華北交通の社員会誌『興亞』に、戦時の満州でみた日本人を描いている。酔っ払つてあたりをどなりちらしている「盟主日本人」を揶揄した句を発表。

- 東洋の盟主ださうな千鳥足 （1931）
- 徳はなし況んや言語不通をや （1931）
- 落書きも支那は一首の詩をしるし
- （日本の丘陵が中国に行つて驚いたのが落書き。どれも見事な筆跡の詩であったという。）
- 「考えない葦」ジグザグとせめられる夢ならぬ過去や黄土のしみいくばく
- 神武以来食えぬ人あり放つとかれ

—鶴彬・交流の広場—



浄專寺境内の墓碑・句碑の前（6月4日）

鶴彬生家の前（6月4日）
碑の右側が鶴彬の従甥 喜多義教さん高松歴史公園の鶴彬の句碑の前
右から3人目の水色の帽子をかぶっておられるかたが水口裕子さん（6月4日）卯辰山・玉兎ヶ丘公園の「平和の子ら」像の前
(6月17日)

6月4日、17日、22日、たて続けに鶴彬資料室に訪問者がありました。

こんな過密な訪問はじめてかも知れません。訪問されたのは「**富士国際旅行社**」というスタディーツアーを企画する会社が募集した御一行様でした。（**富士国際旅行社**について18ページに紹介）

今年が平和を考える歴史の節目ということもあるのでしよう、富士国際旅行社が意識的に企画を組んだのかもしれません。特に昨年來の能登地震と志賀原発や建設計画が白紙になつた珠洲原発を一体に考え、被災現地を視察、応援を兼ねて学ぶことになりました。

(渡辺記)

9月に入つても多数のスタディーツアーの方々が訪問される予定です。

澤卯辰山の鶴彬顕彰句碑にも足を伸ばしていただきました。

たかまつまちかど交流館3階の鶴彬資料室
右端で資料を手にしているのが、
顕彰会の渡辺寛事務局員（6月4日）

卯辰山の鶴彬顕彰句碑の前（6月17日）

旅行社に情報提供された元内灘町議員・水口裕子さんも米軍試射場跡地や内灘郷土資料館を案内、金沢卯辰山の鶴彬顕彰句碑にも足を伸ばしていただきました。



当時の地図を見ながらお話し下さっている萩野富士夫先生

まちかど交流館3階鶴彬資料室にて
荻野先生と並んでいるのは、顕彰会の板坂洋介副会長浄專寺境内の鶴彬の墓碑と句碑の前
左側は顕彰会の平野喜之事務局長（浄專寺住職）

6月15日、金沢で治安維持法について講演された萩野富士夫先生が、鶴彬を顕彰する会の副会長である板坂洋介さんと鶴彬資料室を尋ねて下さいました。

鶴彬は治安維持法で逮捕され、最後は豊多摩病院で亡くなりました。先生は現在、その病院の近くにお住まいでした。

資料室には、当時の地図が貼り付けてあるのですが、「ここに陸軍中野学校があつたのですよ。今は…」とか、いろいろ教えていた

だきました。

「現在、治安維持法と同じような法はあるのですか？」とお尋ねしたところ、「30年前にオウム真理教に適用されそうになつた破防法ですね。でも、破防法はみんなから結構マークされていてなかなか適用するのが難しいので、また新たな法を作ろうとするでしょうね、気付けないと。犯罪捜査のための通信傍受に関する法律など諸々も危ないといえば危ないです。それから…」とお答えくださいました。

私は鶴彬を顕彰する会の事務局長をしているおかげで、いろんな活動や研究をしている方々と知り合いになれます。大変、役得です。

浄專寺境内にある墓碑にもお参りいただき、**胎内の動き知るころ 骨がつき**の句碑の前で、板坂さんに写真を撮っていました。

(平野記)



左から遠田、神山監督、平野
監督の手にはたかまつまちかど交流館で折った千羽鶴



安孫子のハーティーセンター秦荘大ホールで
講演中の神山監督



会場入り口付近のテーブルに飾った千羽鶴、
はばたき、フェスタのチラシ、リーフレットなど

8月24日、滋賀県愛知郡愛荘町安孫子のハーティーセンター秦荘大ホールで開催された「第29回仏教徒平和のつどい」に、顕彰会事務局の遠田勝良さん、喜多義教さん、そして私の三人が参加いたしました。

第一部は全戦没者追悼法要、第二部第一は映画『鶴彬—こころの軌跡』、第二部第二は神山征二郎監督の御講演でした。

開演は13時半からでしたが、私たちが会場に到着したのは11時半でした。まずは神山監督にご挨拶をするために、講師控室に伺いました。

監督のご実家のすぐ近くに専宗寺という浄土真宗本願寺派（西本願寺）のお寺があり、監督の御尊父、御祖父様はそのお寺の門徒代表を務めておられたそうです。その専宗寺の先代の坊守（御庫裏）さんは安孫子のお寺から嫁がれ、監督のお母様の葬儀式には、安孫子のお寺からも僧侶がお参りに来られたということで、安孫子のお寺と監督とは深いご縁があつたのでした。

会場の入り口付近のテーブルに、たかまつまちかど交流館で折った折り鶴を飾り、今年のフェスタ（9月14、15日）のチラシや会報「はばたき」、鶴彬川柳大賞のチラシ、鶴彬のリーフレットを置きました。つどいが終わつたあと、ほとんどなくなっていましたので、持つて行き甲斐がありました。

映画の上映中に泣いておられた方をお見受けしました。私は監督のお話の中で「戦争が終わらないのは戦争で金儲けをしたい人たちがいるからだ」という言葉を聞き、なるほどと思いました。車で片道3時間半はかかりましたが、参加できて本当によかったです。

財政の現状報告

顕彰会 財政係 小山 広助

年間の主事業は①機関誌「はばたき」発行です、会の発展には重要な武器です。支出の現状は印刷、発送費などの高騰があり発行回数の減も考慮しています。②フェスティバルの開催です、今年は「鶴彬川柳大賞」第30周年記念大会として昨年から準備をしてきました。事業を実施する財政状況は、収入は会員の会費、購読料、物販売上ですが、会の運営費と機関誌発行するだけの收支です。毎年開催するフェスティバルの財源は寄付金収入を頼りにしてきました。

今年の事業「鶴彬川柳大賞」は昨年から準備をして、県と市の地域文化活性化事業に応募し財政補助を予定していました。審査の結果、事業は補助金対象になりませんでした。フェスティバル事業は先行して進めて来たので予算上収入の目途が立たないが事業変更せずには実施することになりました。

本年度も寄付金収入を財源として会員以外からも広く寄付金を募ることになりました。目標は50万円、現在までに15万円の寄付金を戴きました。本当にご支援感謝申し上げます。財政状況の一端を報告いたしました。

編集後記

鶴彬を顕彰する会事務局 平野 喜之

今年は、「鶴彬川柳大賞」応募30周年ということで、高松歴史街道フェスティバルに向けて新しい企画をしました。たとえば、フェスタ1日目（9月14日）のかほく市民川柳祭の表彰式の前には、はまなすコーラスや高松少年少女合唱団の合唱を予定しております。そのご縁もあってか、高松少年少女合唱団の主宰者である櫻井晴美さんは「はまなす通信」に鶴彬のことを連載で書いて下さいましたし、高松少年少女合唱団の子供たちがたかまつまちかど交流館で折り鶴を折ってくださいました。

フェスタ2日目（9月15日）には白山市のフォーケグループの「でえげっさあ」のコンサート、冬のトさんの「鶴彬と大阪を歩けば」という講演も予定しています。

このように新しい企画盛りだくさんの今回のフェスタですが、この同じ頁（上段）で小山広助さんが書いてくださっているように、県と市の地域文化活性化事業に応募し補助金をいただけると思っていましたが、結局補助金の対象にはなりませんでした。しかし補助金がなくても行事の予定を変更しませんでしたので、顕彰会の財政状況が非常に厳しくなりました。

財政状況が厳しいのはどんな人でもどんな会でも同じだとは思いますが、寄付金でのご支援、よろしくお願ひいたします。

鶴彬を顕彰する会



問い合わせ先



「はばたき」
ダウンロード



鶴彬という人



■発行 鶴彬を顕彰する会

■事務局 〒929-1215

石川県かほく市高松ヶ66 浄専寺（平野喜之 気付）

TEL・FAX 076-281-0546

携帯TEL 090-8209-3679

■E-mail : yoshiyuki.h.1192@gmail.com

■ホームページ <http://tsuruakira.jp/>

◆会員募集◆（随時受付）

*年会費3,000円（団体3,000円）

3,000円には「鶴彬通信 はばたき」購読料含む

*「はばたき」購読のみの場合は2,000円/年

郵便振替口座 00740-5-75480

加入者名 「鶴彬を顕彰する会」